

# 幼稚園における音楽表現活動の実際 ——楽器遊びの取り組みに着目して——

溝口 綾子

帝京短期大学 こども教育学科

## 【抄録】

**【問題・目的】** 子どもは乳幼児期から音に興味を示し、身体を動かしたり音の出る玩具や楽器に触れたりする。こうした姿は表現しようとする発達の母体となっている。音楽表現力が増す幼児期において楽器との出会いは重要である。幼稚園における楽器遊びを中心とした音楽表現活動に焦点を当て、子どもの実態と保育者の援助について考察する。また、保育者の音楽性と保育実践との関連性を検証する。

**【方法】** 都内私立A幼稚園4歳児と担任保育者、B幼稚園5歳児と担任保育者を対象に2017年10月から2月まで手作り楽器、踊りと楽器演奏の表現活動を観察、記録を行う。このことにより、どのような音楽的行為が見られるか、どのような表現活動に展開するかを明らかにする。また、都内及び近県の私立幼稚園5園の保育者（47名）を対象に音楽経験の実態と表現活動に対する意識調査を行い、楽器遊びの現状と保育者の音楽性を捉える。

**【結果】** 保育実践事例の考察から、身近な歌や好きな曲に合わせて楽器を鳴らす活動は子どもにとって楽しい体験となっている。その背景には、約9割の保育者が、好きな遊びの中で子どもが自由に楽器に触れることのできる設定をしていることが挙げられる。すなわち、保育者は子どもが今、取り組んでいる楽器遊びで経験していることの意味を考え、自由感のある計画的な環境の構成をしていく必要があるということである。

保育者の保育経験と音楽経験は並行し、身につけている音楽技術を応用して保育実践することで子どもと共感的理解を生んでいる。多くの保育者は子どもが楽器遊びを通して音色の違い、響き、余韻など自ら音を探し、音楽で楽しむことを重要視している。

**【考察】** 楽器遊びが子どもの自発的な取り組みとなるよう子どもの状態を把握して楽器の設定をすることは演奏する楽しさを味わい、楽器の特徴や扱い方を知り音感や感性を育てている。さらに、友だちと音を合わせる楽しさは感動を味わい共感性や協調性が養われる。子どもの発達を踏まえた音楽的環境の整備は、幼稚園教育の要である環境を通じた教育の中で子どもの主体性を大切にする保育者の姿勢にある。

**【キーワード】** 幼児 楽器遊び 保育者 環境の構成

## I. 問題・目的

乳幼児期において音や音楽に親しむという根本的な活動は、「聴く」ということから始まり、「うたう」「踊る」「楽器を鳴らす」という活動につながっていく。この根本的な「聴く」という活動は、胎児期において様々な機能の中でも聴覚機能が最も早く現れることから頷ける。鈴木・藪中<sup>1)</sup>は、胎児期の聴覚機能は胎生20週～23週前後で発達し、胎児は母親の胎内で母親の心拍音、血流音、母親の声、外界の音などを聴いて成長するという。さらに、28週～31週で聴覚が完成するため、外界の強い音に反応し、高音や低音も聞こえるという。すなわち、子どもの音との出会いは出生前の胎児期から始まっていると考えられる。子どもは乳幼児期から音に興味を示し、身体を動かしたり音の出る玩具や楽器に触れたりする。熊谷<sup>2)</sup>は、一

般的に楽器とは音楽表現のための道具という意味をもつが、乳幼児は音の出る玩具とみなしている。それはガラガラやメリーオルゴールなどの音の出るものが大部分であり、音への興味や関心がいかに旺盛であるかを示している。乳幼児にとって、これらは応答性のある玩具に興味、関心を示している姿であり、楽器を鳴らしているという意識ではないことを指摘している。このような姿は表現しようとする発達の母体となり、経験を繰り返す中で音に対する感性の芽生えとともに音の出るものへの興味や関心が深まっていくと考えられる。

生後1～2か月ころに初期の喃語 (babbling) が始まる。この喃語が基になってことばや歌のメロディーへと発展していく。<sup>3)</sup> 子どもにとって、うたう活動は遊びであり楽しい経験であり生活そのものである。したがって「聴く」「うたう」ことは音楽表現の基盤

であり、遊びを通して身の回りの音を聴いたり、歌ったりなどの自発性に基づく体験は、音の出る玩具（楽器）に触れて体を動かすという音楽表現活動を誘発させる機会となっているといえよう。

音楽的表現力が増す幼児期において保育の場では楽器との出会いは重要である。幼稚園教育要領（2017年4月告示）<sup>4)</sup>の第1章、総則には幼稚園教育において育みたい資質、能力及び幼児期の終わりまでに育てたい姿として「豊かな感性と表現」について「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友だち同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲を持つようになる」と示されている。筆者の場面観察によると、楽器遊びに自発的に取り組んでいる場合、多く見られる姿として最初は興味本位に目にした楽器をたたいたり鳴らしたりすることを楽しんでいるが、次第に音楽に乗りリズムに合わせようとする。やがてはみんなで合奏することを楽しんだり、自分でリズムや鳴らし方を工夫したりする様態がみられる。一方で、発表会などの保護者の参観する行事において楽器遊びの出来栄を意識した完成形を求める保育者主導になりがちな場面も散見される。

本研究では、幼稚園における楽器遊びを中心とした音楽表現活動に焦点を当て、楽器遊びの実践事例から実際の保育における子どもの実態、保育者の援助の在り方を考察する。さらに保育者の楽器遊びの展開や指導の方法、教材、教具の活用の実態を捉え、保育者の音楽性と保育実践との関連性を検証する。これらは保育の場における音楽表現活動の実践に示唆を与えることができると思う。

## II. 方法

### 1. 調査対象者

都内私立A幼稚園 4歳児と担任保育者  
都内私立B幼稚園 5歳児と担任保育者  
都内及び近県の私立幼稚園 5園の保育者47名

### 2. 調査時期

A幼稚園及びB幼稚園において2017年10月～2018年2月まで行う。

都内及び近県の私立幼稚園5園に2018年6月、質問紙調査を依頼し、約1か月で回収する。

### 3. 調査内容

#### (1) 音楽表現活動の実際の観察及び記録

A幼稚園において手作り楽器の場면을観察及び写真撮影を行い、どのような音楽的行為が見られるかをよみとり、保育者の援助について考察する。

#### (2) 音楽表現活動の展開の実態把握

B幼稚園の踊りの中で楽器演奏を取り込んだ場面の観察及び動画撮影を行い、どのような表現活動に展開しているかを捉え、保育者の援助について考察する。

#### (3) 幼稚園の保育者の音楽性と保育の実際の検討

幼稚園における保育者の音楽経験と保育の実際をとらえるとともに音楽表現活動に対する意識調査を行う。これらをKJ法で分析する。

## 4. 倫理的配慮

#### (1) 幼稚園及び保護者への同意

A幼稚園、B幼稚園の所属長、担任保育者、保護者へ研究の趣旨や個人情報の遵守を説明し、本論文に幼稚園での視聴内容掲載の承諾と同意を得ている。本研究で取り扱う事例において登場する個人名や地域や園が特定される可能性のある表現は事例の真正性が損なわれない範囲で修正している。

#### (2) 研究テーマについての調査協力への同意

幼稚園教諭47名と所属長へ研究の趣旨について説明し、質問紙調査の内容を研究に使用することの同意を得ている。また、調査内容について本研究以外の目的で使用しないことを伝えている。

(3) 本研究内容は共同研究者2名と2018年10月に日本教材学会第28回で発表をしている。共同研究者2名にはこの発表内容を加筆、修正して論文投稿することの承諾と同意を得ている。

## III. 結果

### 1. 保育実践事例

以下の2つの事例は、学級担任保育者の保育記録と筆者の観察記録、写真、動画及び担任保育者への聞き取り調査をまとめたものである。

#### (1) 手作り楽器と発表会（A幼稚園10月～2月）

4歳児学級では、子どもたちが好きな楽器を自由に使えるようにタンバリン、カスタネット、鈴などの打楽器を保育室にコーナーとして常設している。そのため、歌やCDの音楽に合わせて踊ったり楽器を鳴らしたりする姿は日常的にみられる。数人の子どもたちは、運動会で踊った「イロトリドリ」の曲に合わせてカスタネットや鈴を鳴らしながら踊っている。10月下旬ころ、2～3人の子どもが園庭で集めた木の実や制作コーナーにある廃材を使ってマラカス作りをしている。それを真似てマラカスづくりをする子どもが増えていく。作る過程では木の実の種類や数、廃材の大きさなどによって出る音の違いに気づいて工夫する姿が見られる。この姿をきっかけに楽器作りが学級全体

に広まり断続的ではあるが長い間続いていた。

2月上旬の保護者保育参加日に親子で楽器作りと発表会をすることになった。家庭から持ってきた廃材を使って保護者のアイデアや助力も見られたものの、出来上がった楽器はカスタネット、ギター、太鼓など様々である。音がうまく出ないものもあったが、子どもは楽器として形になったことを喜びCDやピアノの伴奏に乗って発表会を楽しんでいる。

保育参加日後も客席を作り、演奏するグループと観客として聴くグループに分かれて交替して遊ぶ姿が続いている。

このことから、本幼稚園は、自発的な遊びを中心とした保育の実践を心がけ計画的な環境の構成を試みていることがわかる。例えば、子どもたちの間ではこの時期ならではの自然物を使った遊びが多くみられる。具体的な状態を見ると、制作ワゴンには廃材と園庭で子どもたちの集めた木の実（どんぐり、椎の実、まつぼっくり）や石ころ、保育者の用意した小豆や米、ビーズ、カットしたストローなどを整理して置いている。それらを目にした子どもはすぐにマラカス作りに取り組み始め、出来上がったものを鳴らすと、周りの子どもたちが既成の楽器とは異なる音に気づき真似し始めている。保育者も一緒に鳴らしては共感を示している。さらに保育者は多くの子どもが取り組むと予測していたのであろう、材料や素材を多めに用意している。子どもたちはマラカスを仕上げることのみでなく、その過程で中に入れる素材とその量の違いや入れ物となる廃材の種類（プリン容器、牛乳パック、ペットボトル）や大きさによって音の違いに気づいて振り方やリズムのとり方を工夫するという音楽的行為がみられる。

このように楽器に対する興味や関心が高まってくると、自分で音を作ってみたいという欲求が高まってくるのであろう。この手作り楽器での遊びの状態は、最初は作ることや鳴らすこと自体を楽しんでいるが、次第に音楽に合わせて拍子打ちやリズム打ちを楽しむようになっていく。加えて、保育者が目の前の子どもの欲求を捉え、廃材や素材を用意することによって子どもたちは自由に工夫しながら楽器作りに取り組み、出来上がった楽器の音色や響きを繰り返し楽しみ、親子参加型の発表会へと展開したと考える。

## （2）C児と大太鼓（B幼稚園5歳児10月～2月）

年長組の1学級に自閉症のC児が在籍している。学級の三分の一の子どもたちは3歳児学級からC児と一緒に過ごしているため、C児の状態を認めつつ仲間の一員として接している。

10月中旬頃、日ごろからCDで聴いていた「愉快的

森の仲間たち」を12月に予定されているお遊戯会にしたいという子どもたちの声を取り上げ演ずることになった。担任保育者はC児も参加する方法に苦慮していた。そのような過程で子どもたちの中には踊るだけではなく曲を聴きながら楽器を鳴らす子どもの姿も出てきた。これに混ざってC児もタンバリンを自分流に叩いて遊んでいる姿が見られた。

そこで、保育者は、踊りだけではなく合奏を取り込んだ演目にするのでC児も参加できるのではないかと考え子どもたちに提案した。この演目をやりたい子どもたちは男女合わせて11名でC児に関心を示す子どもたちばかりではなかったが、中には面倒見の良いD児がいた。

子どもたちは1～2週間、タンバリン、トライアングル、太鼓を用意すると自由に奏でることを楽しんでいる。C児は保育者の膝に乗りご機嫌でこの様子を眺めていたが、しばらくすると大太鼓に興味を持ち、触れたり嗅いだり耳を近づけたりする姿が見られた。

11月になり、保育者が各自一番やりたい楽器を決めるように声をかけると男児4人が大太鼓をやりたいと言う。そのような中でD児はC児が大太鼓を気に入っていることに気づき、C児が大太鼓をすることを提案する。すると、他の男児が大太鼓は叩く面が2面あることに気づき、C児とD児の2人で片面ずつ叩くことを思いついた。

次週になりC児は他児に誘われると練習に参加するもののみんなのリズムに合わない。そこで、担任が「せーの」の掛け声でタイミングをとれるようにすると、それに合わせてD児は一方の手でC児の背中を軽く叩いてリズムをつかめるようにした。C児は次第にリズムに乗れるようになり踊りにも加わるようになっていく。

本事例では、保育者は自閉症というハンディのあるC児が他児と一緒に遊戯会で踊るという経験をしてほしいと願い、今、C児が興味を示していることは何か、必要な経験は何かをおさえている。すなわち、タンバリンや太鼓などの打楽器に興味を抱いている様子を捉え、踊りのみでなく楽器演奏を組み入れることで踊りに関心を向けるのではないかと考えたのである。そして、特例ではあるが太鼓の両面をたたくという子どもたちの提案を取り入れ、C児とD児と一緒に叩くことを認めている。

このことから、保育者は自閉症児を特別扱いするのではなく健常児とともに楽しめるよう特別な配慮をしようとしている姿勢がうかがえる。すなわち、障害のある子どもも健常な子どももともにいる空間が保育の場であること、生活を共にするという感覚とそれを可能にする日常の出来事を大事にしている保育者として

の姿勢である。<sup>5)</sup> この学級の子どもたちは、5歳児の発達の過程で見られる友だちとのかかわりの中で互いの思いや考えを共有し、共通の目的の実現に向けて考えたり協力したりしてやり遂げる協同性が育っていると推察される。一方で、保育者は年長になってC児と他児とに成長の差が出てきていることは認識しながら

も、活動の過程においてC児の楽しみ方を優先しつつ他児の中にどの程度溶け込めるのかという不安感をぬぐえない状況がよみとれる。

以上(1)(2)の事例から、身近な歌や好きな曲に合わせて楽器を鳴らすという活動は子どもにとって楽しい体験となっていることがわかる。このような楽

(Table 1) 楽器遊びについて

回答数(47)

	様 態	頻 度
	保育の中で楽器を使用： はい(36) いいえ(11)	
楽器遊びの展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>歌やCD、ピアノ伴奏に合わせて自由に楽器を使えるよう設定している</li> <li>年齢、発達、時期に合わせて打楽器を主に設定している</li> <li>音楽や歌に合わせてリズム打ち、分担奏、合奏をする</li> <li>リズム遊びや身体表現で楽器を組み入れる</li> <li>保育者の楽器使用の姿を見せたり、子ども同士の発表の機会を持つ</li> <li>廃材で手作り楽器を楽しむ</li> <li>楽器で音探し、音遊びを楽しむ</li> </ul>	<p>10</p> <p>9</p> <p>5</p> <p>5</p> <p>3</p> <p>3</p> <p>3</p>
楽器の扱い方	<ul style="list-style-type: none"> <li>楽器を大切に扱うように約束(片づけ方、正しい持ち方)を伝える</li> <li>音を楽しむために楽器の使用方法を指導する</li> <li>正しい使い方、音の出し方を実演し見本を示す</li> <li>自由に遊ばせて慣れてきたら扱い方を教える</li> <li>鍵盤ハーモニカは準備、扱い方、片付け方を全体に説明する</li> <li>特に指導はしていない</li> </ul>	<p>12</p> <p>6</p> <p>3</p> <p>3</p> <p>2</p> <p>2</p>
楽器の鳴らし方	<ul style="list-style-type: none"> <li>遊びの中で自由に試させて楽器遊びの楽しさを感じられるようにする</li> <li>音探し、音作りの過程で様々な鳴らし方を保育者も一緒に試す</li> <li>音の大小、響きの違いに気づくことができるよう保育者が見本を示す</li> <li>鍵盤ハーモニカは、音階や指の使い方を指導し強弱や音色の違いを伝える</li> <li>特に指導していない</li> </ul>	<p>11</p> <p>8</p> <p>6</p> <p>4</p> <p>1</p>
育ち	<ul style="list-style-type: none"> <li>音を楽しむ感性やリズム感、音感など豊かな表現力が養われる</li> <li>友だちと音を合わせる楽しさや感動を味わい、協調性が育まれる</li> <li>音への興味、楽器への興味や関心が深まる</li> </ul>	<p>10</p> <p>8</p> <p>7</p>
指導上の悩み	<ul style="list-style-type: none"> <li>楽器の特徴を把握していても幼児への指導の実際が難しい</li> <li>子どもの表現を引き出す指導知識や技術が不十分なため、保育者としての表現力が乏しい</li> <li>ピアノや他の楽器が得意な子どもとそうでない子どもの個人差ある中で指導が難しい</li> <li>楽器の数が限られているため、全員の子どもが楽しめるような指導が難しい</li> <li>幼児期に楽器を正しく上手に弾く必要があるのか疑問</li> </ul>	<p>5</p> <p>3</p> <p>3</p> <p>2</p> <p>1</p>

しく活動できることが子どもの音楽への興味や関心を深めることになる。そのために保育者は、実際の保育において遊びの要素を取り入れ無理なく楽器が日常の教材、教具として子どもたちに使われるように創意工夫することが大切になる。そのことによって音楽的行為そのものが楽しいと実感できる指導方法が導き出されると考える。

## 2. 幼稚園における楽器遊びの実態

都内及び近県の私立幼稚園5園(47名)の保育者に楽器遊びについての自由記述の回答から記述内容をKJ法で分析し、その結果「楽器遊びの展開」「楽器の取り扱い方」「楽器の鳴らし方」「育てていること」「指導上の悩み」の5つにカテゴリー化した。

(Table 1)

楽器遊びの展開については、約9割の保育者が好きな遊びの中で子どもが自由に楽器に触れたり鳴らしたりして遊べる環境を設定している。楽器の種類は、年齢や発達、時期に合わせてタンバリン、カスタネット、鈴など子どもが扱いやすい無音程打楽器を設定していて、CDや歌、保育者のピアノ伴奏に合わせてリズム打ち、分担奏、合奏のほか、リズム遊びや身体表現に楽器を組み入れている。このほか、有音程打楽器として木琴や鉄琴、旋律楽器として鍵盤ハーモニカやキーボードを調査依頼した全5園で設定している。1割弱の保育者からは、保育者自身の演奏する姿を見せたり、自然物や廃材を教材として手作り楽器を楽しんだりする姿も報告されている。

楽器の扱い方では、ほとんどの園で楽器を大切に扱うよう他の玩具とは異なる片付け方や正しい持ち方、さらに、音を楽しむために楽器の使用方法を伝えている。このような中で1割弱の保育者は、自由に遊ばせて慣れてきたら扱い方を知らせたり、特に指導したりしないという意見も見られる。鍵盤ハーモニカ(ピアノ)を5歳児クラス全員に一人1台ずつもたせている園では、準備の仕方、扱い方、片づけ方など全体指導で行っているという報告である。他の園では学級に数台設定していて、保育者が扱い方や鳴らし方のモデルを見せ、興味を持った子どもから自由に取り組めるようにしている。全5園とも衛生面から吹き口は一人1個を持たせる配慮をしている。

鳴らし方の指導では、約8割の保育者が遊びの中で自由に試させて楽しさを感じられるようにしている。筆者の場面観察によると、調査対象園のうち2園の保育者は音探しや音作りでは木琴やピアノでオスティナート(ostinato)奏法<sup>注1)</sup>やグリッサンド(glissando)奏法<sup>注2)</sup>を取り入れて子どもと一緒に楽しむ姿がある。さらに、音の大小、響きの違いに気づ

くことができるよう援助している様態がみられる。一方、前述した楽器の扱い方で鍵盤ハーモニカを一斉指導している園においては、最初の1回目は音階や指の使い方、強弱のつけ方の指導をしていることが報告されている。幼児期の多くの子どもは読譜力や演奏技術が身についているということではないので、心身の発達条件を踏まえながら段階を追って指導し、訓練のようにならないよう子どもが楽しく参加できる方法を工夫することが大切である。

楽器遊びで育まれていることについては、全体の約6割の保育者が回答している。その内容は、まず楽器に触れることで音を楽しむ感性やリズム感、音感など豊かな表現力が育まれている。また、友だちと音を合わせる楽しさや感動を味わっている姿は協調性や共感性が育まれていると捉えている。さらに、2割弱の保育者は、楽器遊びを通して音や楽器そのものへの興味や関心が深まると考えている。これらのことから保育実践の場で多くの保育者は楽器遊びを保育の中に取り入れる場合、かなり自由感のある子どもに楽しい経験になるようにしたいという姿勢が基盤にあることがうかがえる。

幼稚園教育要領解説<sup>6)</sup>によると、「子どもが必要な体験を積み重ねていくことができるように発達の道筋を見通して教育的に価値のある環境を計画的に構成していかなければならない。つまり、子どもが主体的に活動を行うことができるか否かは環境がどのように構成されているかによって大きく左右される。」と示されている。子どもにとって楽しい音楽経験は豊かな感情が育まれるばかりでなく、保育者の計画的な環境の構成により子どもの主体性が育まれる。また、楽器の種類別収納やみんなで協力して片づけるなど、生活に必要な習慣や態度の育ちにもつながっていると考える。

一方で、指導上の悩みを抱えている保育者も3割みられる。具体的には、「楽器の特徴を把握していても子どもへの実際の指導が難しい」あるいは「子どもの表現を引き出す指導知識やテクニックが不十分なため、自分の保育者としての表現力が乏しい」また「ピアノや他の楽器が得意な子どもとそうでない子どもの音楽的な経験の個人差に応じた指導方法がわからない」を挙げている。これらの保育者は保育経験が3年未満である。一般的に保育経験の長い保育者は、日常保育において一人ひとりの幼児理解の基に充実した遊びとなるよう保育者自身は自然体で子どもとかわっている。これは保育者自身の経験知や感性が大きく関係している。<sup>7)</sup>音楽表現活動においても同様のことがいえよう。

今回の質問紙調査で多くの保育者は、子どもたちが

楽器遊びを通して音色の違い、響き、余韻など子ども自らが音を探し、音楽で楽しむことを重要視している。

### 3. 保育者の音楽性と保育実践

保育者の保育経験と音楽経験についての回答は次に示すとおりである。(Table 2)

質問紙調査「音楽の習い事、演奏経験がある」の回答は、8割の保育者が「経験がある」としている。このうち保育経験7～10年から21年以上の保育者が約半数となっていて、音楽経験も同様に半数である。こ

のことから比較的長い保育経験者が音楽経験も長いことがわかる。音楽経験として音楽を聴く経験は、やはり8割の保育者が「ある」と回答している。聴くジャンルは、J-POPが約6割であり、聴く方法は、YouTubeやCDなどとなっている。音楽の習い事の経験については、9割の保育者が「ある」と回答している。習った楽器名はピアノが6割と半数以上となっている。これらの保育者は「聴く」「演奏する」という音楽経験を通して自身の音楽性を高めているといえよう。

次に「音楽経験が保育に役立っていること」の力

(Table 2) 保育経験と音楽経験

回答数(47)

保育経験	性別： 男性(8)		女性(38)		未記入(1)(7)	
	1年未満	2～3年	4～6年	7～10年	11～20年	21年以上
	0	11	9	18	5	3
	3	7	7	11	9	3
音楽経験	音楽を聴く経験： 聴く(33) 聴かない(11) 未記入(1)					
	聴くジャンル： J-POP(25) ジャンルを問わず(13) キッズソング(2) アニメソング HIPHOP R&B 劇団四季 ジャズ・ロック イージーリスニング 邦楽					
	聴く方法：YouTube CD DVD TV スマートフォン ウォークマン ライブ コンサート					
	音楽の習い事経験： ある(37) ない(8) 未記入(1)					
	楽器名： ピアノ(28) カスタネットなどの打楽器(2) ヴァイオリン フルート ピッコロ サックス チューバ トランペット 木琴 トロンボーン エレクトーン 太鼓・和太鼓 アコーディオン ギター ウクレレ リコーダー コントラバス 二胡					

(Table 3) 音楽経験が保育に役立っていること

回答数(35)

	様 態	頻 度
保育に役立っていること	・ ピアノのテクニック(初見がきく、コードで伴奏できる、弾き歌いできる)がある	10
	・ 楽譜が読める、音程がとれる、アレンジができる等、自信がある	9
	・ 保育に音楽(歌、手遊び、リズム遊び)を入れると子どもは楽しさを感じ喜ぶ	9
	・ ピアノで弾きうたいや楽器演奏の様子を見せる	6
	・ 音楽全般の指導が楽しい	1

テゴリーについて、記述内容をKJ法で分析する。

(Table 3)

園によってバラつきはあるものの保育経験や音楽経験の長い保育者ほど有意を示している。その実践内容は、「初見がきく」「楽譜が読める」「弾き歌いができる」の音楽技術を応用して「歌、手遊び、リズム遊びを取り入れる、CDを聴く」など、子どもとともに音楽を楽しむ姿である。このような実践によって子どもが「自分も歌いたい」「楽器を演奏したい」という欲求を持ち、次第に音楽表現活動への興味や関心度を深め、主体的な活動の展開につながっていくことが推察できる。

保育経験とともに音楽経験の長い保育者は、日ごろから身につけている音楽技術を基盤として音楽表現活動を実践することによって、子どもとの共感的理解を生み、ともに楽しい音楽経験となっている。しかし、保育経験2～3年の保育者にあっても子どもとともに音楽を楽しむ姿勢がみられる。これについての回答からよみとれることは、保育者自身が音楽をいかに好きで楽しんでいるかという保育者の姿勢がその学級に音楽的な雰囲気となって醸し出されてしていることや、保育者自身が日常的に良い音楽に親しむことで自身の音楽性や感性を磨いていることである。そのことが子どもとともに音楽を楽しむ姿勢へとつながっていると考えられる。

これらのことから、保育者自身がどのような音楽的環境の中で過ごしてきたのか、また現在も自身の音楽的環境をいかに保っているかが、音楽表現活動の実践面や子どもの育ちに大きくかかわってくるといえよう。

#### IV. 考察・まとめ

Ⅲの(1)(2)の実践事例から楽器遊びの様態をまとめると、子どもの自発的な取り組みとなるよう日常の子どもの状態を把握して教材、教具として楽器を置く場所や種類、数に配慮して設定している。また、そこに子どもがどのようにかかわっているかの姿をよみとり、環境の再構成や保育者の言葉かけ、モデルを示すなどの直接的な援助をしていることである。

楽器遊びについて田中<sup>8)</sup>は、「子どもたちの身近に楽器があって自由に触れられるようにしておきたい。その中から楽器の持つ音色、特色など、一人ひとりが音に対する新しい発見をしていくことになる」さらに、指導の進め方について「初めから正しい持ち方や基本的なリズム打ちなどを求めるのではなく、その子どもの個性によっていろいろな鳴らし方であってよい」と指摘している。

これらのことから日常保育において子どもにとって自由感のある雰囲気の中で、歌や好きな曲に合わせて楽器を鳴らすことはメロディーやリズムを感じる楽しい経験につながっていくと考える。また、今回の研究対象である多くの保育者は子どもが遊びの中で自由に楽器に触れながら、その音色や響きなど楽器に対する興味や関心を持てるような計画的な環境の構成が重要であると認識していることが明らかとなった。さらに、友だちと音やリズムに合わせてみんなで演奏する分担奏や合奏は、楽器や曲に対する音楽的な役割を認識し、友だちと一緒に演奏することで仲間意識や社会性、協調性をも培われると考える。また、手作り楽器の取り組みは音作りをすることから始まり、音色や響き、鳴らし方などを発見する音楽的行為となり、これは音楽の基礎となる貴重な体験であると考えられる。

これらのことから楽器遊びにおいて保育者が指導し、子どもに経験してほしい「内容」についてまとめると次のようになる。

- ・自分の好きな楽器を持って知っている歌や曲に合わせて演奏して遊ぶ楽しさを味わう。
  - ・遊びを通して楽器の特徴を知り、扱い方や演奏の仕方を知る。
  - ・友だちの演奏や先生のピアノ、CDなどを聴いて自分も試してみる。
  - ・いろいろな拍子打ち、リズム打ち、分担奏、合奏を楽しむ、音感や仲間意識を感じる。
- また、楽器遊びの体験で育まれること「育ち」についてまとめると次のようになる。
- ・楽器に触れることで音を楽しむ感性やリズム感、音感など豊かな表現力が育まれる。
  - ・友だちと音を合わせる楽しさや感動を味わうことで、共感性や協調性が養われる。
  - ・楽器遊びを通して音や楽器そのものへの興味、関心が深まる。

これらの「内容」や「育ち」は、発達過程や時期により微細な違いも生ずるであろう。その時期の子どもの姿を的確によみとり適時性を意識することが大切である。さらに、楽器遊びの活動において保育者はどのような援助を行っているかについてまとめると次のようになる。

- ・保育室のコーナーに子どもの発達や時期に配慮して無音程打楽器、有音程打楽器、鍵盤楽器を設定し、子どもたちが自由に組み立てるようにする。
- ・知っている歌やメロディー、リズムに乗りやすい音楽を選曲する。
- ・保育者が様々な楽器を演奏する様子を見せて音楽的な雰囲気づくりや、子どもと一緒に演奏する機会をもつ。

・既成の楽器のほか、手作り楽器で音作り、音探しなどの音楽的行為を引き出す。

このような援助は保育者がそれぞれ意図を持って行っている配慮であり、子どもの主体性を引き出そうとするものである。つまり、保育者の意図性と子どもの主体性のバランスに配慮する援助の重要性を示唆している。

一方で、前項で述べているように、調査対象の園の中には鍵盤ハーモニカについては正しい扱い方や演奏の仕方を一斉的に行っている状況も報告されているが、音楽の技能の習得を主眼に置いていない。これについては筆者がこの園で聞き取り調査をすると「初めて扱う楽器なので最初を丁寧に指導し、その後は一人ひとりの子どもの興味や関心に応じて自発的に取り組む姿を認めたい」という保育者の意図を明確にしている。一般的には、保育の中で幼児には打楽器を中心に使用させるという傾向にあるが、この園のように組み入れ方や指導法によっては多様な楽器を用いることも音楽経験を豊かにするのではないかと考える。

音楽的環境について、杉江<sup>9)</sup>は、子どもの発達段階を踏まえて音楽的環境を整備し、良質の音楽を繰り返し聴かせることにより、生活形成を図ることが望ましいことを指摘している。このことから音楽的環境を整備するとは、子ども一人ひとりの行動の理解と予測に基づいて、子どもとかわる保育者の音楽性や音楽（曲、うた、楽器）を提供する環境を計画的に構成することであると考えられる。

これらの根底にあるのは、幼稚園教育の要である環境を通じた教育の中で子どもの主体性を大切にするという保育者の保育に対する姿勢にあると考える。加えて保育者は重要な人的環境であるため、音楽の美しさ、楽器遊びの楽しさを子どもたちと共感することが大切である。すなわち、子どもの豊かな音楽経験を保障するために保育者は子どもと一緒に豊かな音楽経験をすることである。それは子どもの発達段階に応じた音楽的環境の整備を充実することでもある。一方で、行事において楽器遊びを実践する際には、保育者主導になりがちな場面も散見される。日常保育の中で楽器遊びをどのように発表会等の行事で活かしていくかが今後の課題である。

### 【謝辞】

本研究にご協力いただきました都内私立A幼稚園、B幼稚園の教諭、園児、保護者の皆様、都内及び近隣の私立幼稚園5園の園長先生、教諭（47名）の皆様へ深謝申し上げます。

本研究における共同研究者の細田八千代先生、室井真紀子先生には本論文投稿に同意いただきまして深謝

申し上げます。

### 【注】

- 注1) オスティナート奏法 (ostinato)：同一声部あるいは同一音域である一定の音形を反復すること  
注2) グリッサンド奏法 (glissando)：ある高さ（ピッチ）の音に向かって「上から下」に滑らせるように演奏する方法。スライドとも呼ばれる。

出典：実用音楽事典（2002年）株式会社ドレミ楽譜出版社

### 【参考文献】

- 1) 鈴木みゆき・藪中征代（編）（2005）乳幼児の音楽 音楽之友社 10～12
- 2) 熊谷新次郎（2010）第3章 子どもと音楽の出会い 桶谷弘美・吉良武志・熊谷新次郎・斎藤正義・杉江正美・高橋悦枝（共著）音楽表現の理論と実際 音楽之友社 84～86
- 3) 前掲1)
- 4) 文部科学省 幼稚園教育要領（2017年4月告示）フレーベル館 5～8
- 5) 溝口綾子（2013）第Ⅲ章3（3）統合保育 帝京短期大学こども教育学科（編）教育・保育・施設実習ガイドライン 69～70
- 6) 文部科学省（2018）幼稚園教育要領解説 フレーベル館 41～44
- 7) 溝口綾子（2009）新任保育者と保育実践における課題意識と省察に関する研究 日本教材学会（編）教材学研究第20号 235～245
- 8) 田中恒雄（2008）弾こう 相澤保正・伊藤嘉子・木村博子・児玉裕子・沢田直子・松原康子・田中恒雄・吉野幸男（共著）あたらしい音楽表現（理論編）音楽之友社 10
- 9) 杉江正美（2010）第2章 子どもの成長と発達 桶谷弘美・吉良武志・熊谷新次郎・斎藤正義・杉江正美・高橋悦枝（共著）音楽表現の理論と実際 音楽之友社 20～25

# Practice of music expression activities in kindergarten —— For musical instrument play ——

Ayako MIZOGUCHI

Department of Early Childhood Education, Teikyo Junior College

---

## **【Abstract】**

**【Purpose】** Children are interested in sound from early childhood. Moving their bodies and touching toys and musical instruments that make sounds. Such a figure is the mother of the development to be expressed.

Encounter with musical instruments is important in early childhood. The practice of music expression activities is considered from practical examples of musical instrument play and questionnaire surveys for kindergarten teacher.

**【Methods】** Observe and record musical instrument play from October to February 2017 for A kindergarten 4-year-old and homeroom teacher and B kindergarten 5-year-old and homeroom teacher. A survey of consciousness of music expression activities was conducted on 47 kindergarten teachers for analysis and examination.

**【Results】** Playing musical instruments according to familiar songs and favorite songs is a fun experience for children. For this reason, kindergarten teachers need to have a free environment. The childcare experience of a kindergarten teacher is proportional to the music experience. By applying and applying the music technology that I am wearing, I have created a sympathetic understanding with my children. Many kindergarten teachers attach importance to children looking for their own sounds such as differences in sound, reverberation, and reverberation through musical instrument play.

**【Discussion/Conclusion】** Understand the condition of the child so that playing with the instrument is a voluntary initiative of the child. By setting the instrument, the child knows the joy of playing, the characteristics and handling of the instrument, and nurtures the sense of sound and sensitivity. In addition, the fun of matching sounds with friends can be impressed and cultivate collaboration. The development of a musical environment based on the development of children is in a kindergarten teacher's attitude that values children 's independence in education through the environment, which is the key to kindergarten education.

**【key words】** Child Playing instrument Kindergarten teacher Environment configuration